星野眞吾資料❶「郷土の伝説」挿絵原画を中心に

丸地加奈子

このたび豊橋市美術博物館では、星野眞吾・高畑郁子夫妻ご遺族より自宅・アトリエに残されていた資料を一括受贈することになった。主だった絵画作品については、両作家の生前より収蔵収集を行なってきたが、高畑の没後（2023 年）に残されたものの多くは星野の学生時代の習作や課題、卒業後のスケッチ、下絵などの素描類、作品制作のための素材、写真類などである（そのほか、高畑の作品・資料および交流のあった他の作家の関係資料も含まれる）。ここでは、それらを分類・列記して資料の概要を記すとともに、「郷土の伝説」の挿絵原画について言及したい。

星野眞吾資料

① 学生時代の習作（水彩画、油彩画、スケッチなど）
② 京都絵画専門学校時代の課題制作等
③ パンリアル美術協会～从会時代のスケッチ、エスキースなど
④「郷土の伝説」挿絵原画
⑤ 人拓素材
⑥ その他（アルバム、印章など）

高畑郁子資料

⑦ スケッチ、エスキースなど
⑧ 制作に関わる参考資料

その他作家資料

⑨ 中村正義の下絵
⑩ 平川敏夫のスケッチブック

星野眞吾資料

①学生時代の習作のうち水彩画については、自宅で保管されていた資料に弟妹のサインの入った作画も混在していた。そのため「眞吾」と表記のある学校提出物のみを選択し、尋常高等小学校 3 年次、すなわち 1933-34 年 10-11 歳から豊橋第二中学 1 年次 1937-38 年 14-15 歳までが対象となった。油彩画は年記をみる限りでは、尋常高等小学校 5 年次の 1935-36 年以降、戦後の京都美術専門学校時代までが範囲である。なお、卒業後に手掛けられたスケッチや水彩も混入していると思われるが、それらが納められていた紙箱の表記（星野筆記による「学生時代」ラベル）に原則従った。ただし、箱の中にあったパンリアル時代・从会時代のエスキースは省いている。

・スケッチブック 10 冊（クロッキー帳含む）
・水彩、スケッチ約 250 枚（自画像、学友、家族、風景、静物、ポスター図案、他）
・油彩画約 20 点（自画像、風景画、人物像、その他）

② 京都絵画専門学校時代の課題制作等
・図案科時代 14 枚（各種意匠、ポスター、テキスタイル図案、建築図面、イラスト）
・日本画科時代 4 枚（植物写生・自画像）

③卒業後のスケッチ、下絵類については、スケッチブックあるいはそれらから切り離された状態のものが残されている。年記がないことに加え、スケッチブックについては後年の描き足しも多く、高畑郁子と共同使用していたケースも散見される。多量のため詳細は追って調査することとし、現段階ではおおよその数量と内容を記すにとどめる。＊1

・スケッチブック約 20 冊（うち高畑との共用、手帳、時代区分不明含む）
・エスキース、下図　約 150 枚（他にスケッチブックに挟まれている状態のものが多数）
・色紙絵 2 枚

星野・高畑夫妻は絵画教室のスケッチ旅行のほか、国内外へ毎年のように出かけていたため、旅先での情景を描いたスケッチブックが多く、そこに作品の構想を練ったエスキースも含まれている。そこから切り離されたものが①のスケッチ類に混入している可能性もある。そのほか、地元新聞のカット、うちわ、のれん、商標ラベル、マッチ箱などのデザインを請け負っていたことが、上記のスケッチブックやエスキースからわかった。

なお、上記①～③については、調査後に次号で詳細を紹介したいと考えている。④の「郷土の伝説」原画については後述することとし、⑤⑥の内容について概要を記しておく。

⑤「人拓」は星野が父親の死を契機に着想し、1964 年より取り組んだ独自の表現である。糊を塗布した身体を和紙に押し当て、その痕跡に顔料を定着させるというスタイルで、糊・顔料は人体の凸面に転写される。その後、顔料の付着面をハサミで切り抜き、さまざまなパーツを組み合わせて作品本紙にコラージュしていく。

星野のアトリエには作品未満の「人拓」が数多く残されていたが、いずれも次の作品に用いる可能性がある素材として残されたものであった。その形状は拓を採取した部位によって大小さまざまで、はさみで必要な部分が切り取られた端切れ状のものも多い。素材別に区分すると以下の通りである。

・顔料による人拓約 180 枚（身体、顔、腕、手、下肢、足、不明部位、拡大）
・インクによる人拓 13 枚
・その他、人拓の型紙（背景処理の際に使用）、コピー（拡大して使用）など

⑥その他の資料としては、写真、展覧会パンフレット・案内、印章、記録ノート、道具類などで、写真については、すでに高畑の生前より両作家の作家活動に関わるアルバムの資料提供を受けていたが、残されたアルバムから記録として必要と思われる写真を補完した。この機に既存のアルバムと合わせると約 100 冊にのぼり（そのほか、紙焼写真も多量にあり）、アルバムの支持体および写真の劣化・変質が進んでいるため、アルバムから切り離し、必要なものをデジタル化して残していく予定である。

なお、印章についても、使用した時系列の調査とともに今後の整理を要する。

高畑郁子資料

星野の伴侶である高畑郁子については、星野と同様に生前より作品を購入・受贈してきたが、このたび高畑の主題としては珍しい静物画と、創画会への最後の出品作、制作に関連する資料⑦⑧を対象とした。

・《白桃》1972 年頃　38 × 46.3cm　軸装
・《人達》2019 年　136.5 × 167.2cm　額装

⑦スケッチ、エスキースなど
・スケッチブック 13 冊
※③星野のスケッチブックにも高畑の絵が混在
・スケッチ、下図 24 枚
（コンテ、クレヨンによる裸婦、人物、風景、植物、小下図）
※他にも単独のエスキースが関連するスケッチブックに挟まれている。

高畑郁子《白桃》

⑧作品制作にかかわる参考資料
・チベット系曼荼羅（現地刷物・摺仏）
・経文（漢字）、サンスクリット語経文（刷物）
・参考とした仏画コピーなど
・世界地図（刷物・軸装）

なお、⑧の世界地図のうち軸装された大型のもの（152.8×154.2cm）は、《古地図曼荼羅》（1998 年／豊橋市美術博物館蔵）のイメージソースとなった資料で、戦前に星野の親族が満州から持ち帰ったものであるという。

高畑郁子《人達》

その他作家資料
⑥中村正義下絵（1952 年）1 点
「中村正義の美術館」による星野へのインタビュー（1992 年 2 月 12 日収録）から、1952 年の日展特選受賞作《女人》の前に、日展出品を見据えて着手した作品であったと推察される＊2。主題は子ども二人と犬で、親交の深かった星野・高畑の家で手がけられたという。下絵はめくりの状態で著しく状態が悪いため、処置を施した後で撮影を行い、今後考察する機会を別に設けたい。

⑦平川敏夫スケッチブック（1960 年代）2 冊
いずれも 1960 年代の平川のスケッチである。星野・高畑と平川は中村正義の提唱で 1952 年に設立された中日美術教室＊3 の活動に参加している。正義はまもなく名古屋に拠点を移し、メンバーのひとり大森運夫は教職に就いていたことから、実質的には星野と高畑、平川が指導を行っていたという。平川自身、60 年代は色彩的・構成的にダイナミックに変貌を遂げる時期にあたり、推測ではあるが仲間であった星野らにエスキースを見せて意見を仰いだのかもしれない
スケッチブックのうち 1 冊は、代表作《樹炎》《樹焔》（1964 年）などのエスキースが含まれ、コンテ・着色による樹林スケッチ 7 枚、もう 1 冊にもコンテによる樹林などの風景 12 枚が収められている。

星野眞吾「郷土の伝説」挿絵原画

連載時の星野眞吾（1959.2.8 インタビュー記事より）

④「郷土の伝説」挿絵については、パンリアル美術協会で前衛画家として活動し、抽象形態や物質性を探求していた時期の星野にとっては異色の仕事といえる。前記した中日美術教室を後押しした中日新聞の記事挿絵カットをすでに手がけていたが＊4、豊橋を拠点とする不二タイムス（現：東日新聞）への関わり方はもう少し大掛かりなものであったようだ。

まずは1959年2月8日に「こどもらん」担当としてインタビュー形式で作家紹介が掲載され、パンリアル美術協会での活動や自己の絵画表現について語っている。毎週日曜日（後に月曜日）掲載の「こどもらん」の趣旨は、子どもたちから作文、書、絵画などを募るもので、星野が応募作品について評価を行うとした。おそらくは中日美術教室での指導者としての実績がこの仕事の依頼につながったと思われるが、そこで子どもたちの目を引く企画としてはじまった連載が「郷土の伝説」であり、以後1961年3月13日まで、述べ100話（実質的には99話）にわたって続けられることになる。

連載内容は当地方の民話を紹介するもので、東三河だけでなく、西三河や尾張地方に及ぶこともあり、当初は執筆者名が表記されていないため、新聞社内で民話集や各地の村史などを参照して書き起こしていたと思われる（後に山内孝子、ついで園八雲が執筆）。

なお、この連載にあたり、参照されたと思われる典拠のひとつが『東三河の傳説物語』（1934年／乙部静夫著）で、同書もまた専業的な挿絵画家ではなく、戦前の豊橋洋画壇を牽引した細島昇一に挿絵および表紙装丁を依頼している点も興味深い。

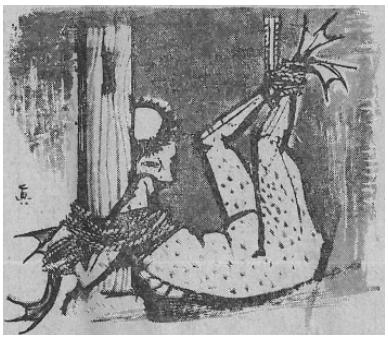
『東三河の傳説物語』表紙：細島昇一

星野の挿絵への取り組みについては、当初は試行錯誤があったのか、墨線による速筆の素描風、時に素朴な児童画風、細く鋭利なペン画風など、表現は一様ではない。矩形を組み合わせたような人体（初期挿画：第６話）などは、同時期の高畑の女性シリーズに近いものがあり、夫婦ならではの遊び心も感じられるが、協働して子供の関心を引く表現を探求していたとも考えられる。星野もまた幾何学的形態に目や手足をつけて擬人化した《争う人々》《条件派B》などを手がけ、社会や組織への批判やアイロニーだけでなく、コミカルなユーモアをしのばせるスタイルを表していた。

初期挿画（参考図版）

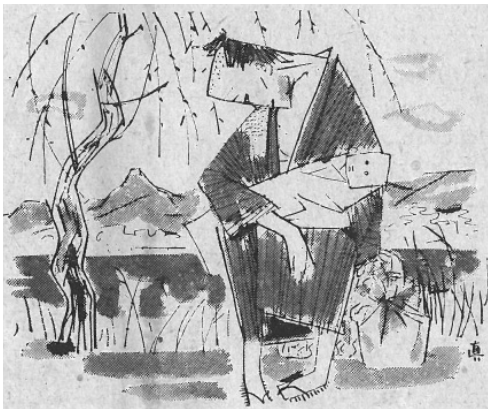
第２話「犬頭のこと」

第３話「眞福長者と青蛇の話」



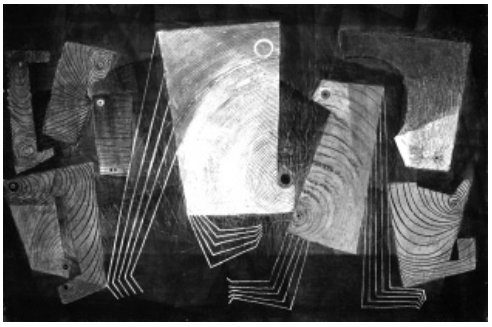
第４話「馬がカッパを引きあげた話」

とはいえ、「郷土の伝説」において試行が見られたのはごくわずかな期間で、自身に合ったスタイルを定めたのか、あるいは新聞社の意向を反映したためか、墨線（ときにサインペンのような均一の太さの線）による写実的な人体・風物描写に落ち着いていったようだ。墨線を主体にするとはいえ、それは日本画的な平明な白描ではなく、洋画家のように骨格とマッスを意識したスタイルであり、前記した学生時代からのデッサンで培われた描写力を前面に出したものであった＊5。受贈資料の14点は、いずれもその時期のものである。



初期挿画：第６話「大池のぬし」

前出③のスケッチブックの中には「郷土の伝説」のエスキースが描かれたものが5冊ほどあった。たとえば、第85話「お波さん」は物語の後半場面が挿絵として採択されているが、当初は冒頭のシーンを構想していたようで、アングルを変えて数カットが描かれている。それらのエスキースおよび原画は、抽象形態を表現手段としていた画家の別の側面を垣間見せるだけでなく、その挿絵が新聞に掲載された年月日によって、スケッチブック自体の年代特定にもつながる。



《争う人々》1964年 (豊橋市美術博物館蔵)

なお、この連載の終了に前後して「ラジオドラマ三河伝説」前編・後編（園八雲作）、「ママの書いた童話」12回、「子供の生活」「子供ページ」などの企画があり、そこにも挿絵を寄せているため、こうした取り組みは実質的に1962年1月1日まで継続されたようだ。

100話のうち作家の手元に残されていた原画は14点のみであったが、スクラップブック3冊に99話の記事が切り抜かれて記録されていた。末尾で受贈原画14点を紹介するとともに、「郷土の伝説」全話の主題を一覧形式に記載し、星野が取り組んだ全容を示しておきたい。

（豊橋市美術博物館　学芸専門員）

注記

＊初期挿画　いずれも星野眞吾資料のスクラップブックより

＊1 パンリアル時代の作品エスキース・スケッチブック等については、作品を所蔵する美術館などへの提供を検討しているため、今後数量が変動する可能性があり、概数を記した。

＊2 中村正義の美術館に残されている小下図にも類似している。

＊3 若い画家たちの生活基盤を確保するため、当時の中日新聞豊橋局長に正義が呼びかけて設立された児童・一般を対象とした絵画教室。平川も後に離れるが、教室は星野・高畑夫妻によって継続された。

＊4 1953年の中日新聞の記事「花の御堂めぐり」より挿絵を手がけている。1955年より朝日新聞も担当。

＊5 星野は尋常高等小学校5年次より田中完教諭の指導の下で油彩画を始め、京都市立絵画専門学校図案科時代には独立美術協会の洋画研究所でデッサンを学んでいた。

参考

「星野眞吾展」図録　1996年　豊橋市美術博物館・新潟市美術博物館

『星野眞吾画集』2019年　高畑郁子発行・大野俊治編

受贈原画

※掲載の地名は新聞記事に則した／（ ）内は現在の地名

	第 21 話 うそこき新佐 1959（昭和 34）年 14×22 紙、墨・インク 上津具村 （現 : 北設楽郡設楽町）		第 35 話 「おしいばち」の由来 1959（昭和 34）年 12×20 紙、墨・インク 豊橋市植田町
	第 28 話 “信玄塚”の火踊 1959（昭和 34）年 22.5×15.7 紙、墨・白色絵具 新城市		第 37 話 石巻山に伝わる話 1959（昭和 34）年 18.5×26.5 紙、墨・インク 豊橋市
	第 29 話 大力くらべの話 1959（昭和 34）年 14.5×17 紙、墨・インク 尾張・三河地方		第 39 話 萩のはねグソ 1959（昭和 34）年 16.5×19.5 紙、墨・インク 北設楽郡東栄町
	第 31 話 首切り地蔵 1959（昭和 34）年 17×14.5 紙、墨 豊橋市中柴町		第 42 話 権現森のトゲなしばら 1959（昭和 34）年 12×20 紙、墨・インク 渥美郡渥美町 （現：田原市）
	第 32 話 山ウバのはなし 1959（昭和 34）年 18.5×17 紙、墨・インク 幡豆郡三和村 （現：西尾市）		第 43 話 子だが橋 1959（昭和 34）年 17.5×15 紙、墨 宝飯郡小坂井町 （現：豊川市）
	第 33 話 龍宮のはなし 1959（昭和 34）年 18×17 紙、墨・インク 滝川村（現：新城市）		第 44 話 いぼがみさま 1959（昭和 34）年 15.5×22.5 紙墨・インク 蒲郡市
	第 34 話 落人塚 1959（昭和 34）年 19×16.5 紙、墨・インク 北設楽郡三輪村 （現：東栄町）		第 85 話 お波さん 1960（昭和 35）年 18×22.5 紙、墨 北設楽郡三輪村 （現：東栄町・鳳来町）

「郷土の伝説」不二タイムス掲載一覧

1959（昭和 34）年

1	2. 8	「だいだらぼっち」のこと
2	2. 15	犬頭のこと
3	2. 22	眞福長者と青蛇の話
4	3. 1	馬がカッパを引き上げた話
5	3. 8	ホイホイ鳥
6*	3. 15	大池のぬし
7	3. 23	天人女房の話
8*	3. 29	てんぐさまの話
9*	4. 5	うなごうじまつり
10*	4. 12	鬼久右衛門の話
11	4. 19	喜見寺の狐
12	4. 26	岩屋観音縁起
13*	5. 3	きつね女房のはなし
14	5. 1	赤子石
15*	5. 17	大入道のはなし
16*	5. 24	馬と牛
17	5. 31	お化けうなぎ
18	6. 7	かんの虫
19	6. 14	阿寺七瀧
20	6. 12	「椀貸し傳説」のこと
21	6. 28	うそこき新佐
22	7. 5	豊島池のぬし
23	7. 12	金時塚の話
24	7. 19	全久院の鱗
25	7. 26	お虎狐
26	8. 2	へっぴりじいさん
27	8. 9	水乞鳥の話
28	8. 16	“信玄塚”の火踊
29	8. 23	大力くらべの話
30	8. 3	時鳥のはなし
31	9. 7	首きり地蔵
32	9. 14	山ウバのはなし
33	9. 21	龍宮のはなし
34	9. 29	落人塚
35	10. 5	「おしいばち」の由来
36	10. 12	馬方弁天
37	10. 19	石巻山に傳わる話
38	10. 26	犬頭明神の口碑
39	11. 2	萩のはねグソ
40	11. 9	葵ヶ池
41	11. 16	やらずの鐘
42	11. 23	権現の森のトゲなしばら
43	11. 3	子だが橋
44	12. 7	いぼがみさま
45	12. 14	わくぐりさま
46	12. 21	血染の臼
47	12. 28	エレン様

1960（昭和 35）年

48	1. 11	腕斬り地蔵
49	1. 18	人崩し場
50	1. 25	徳合長者
51	2. 1	平八郎釜
52*	2. 8	信玄と津具金山
53*	2. 15	鬼まつり
54	2. 22	鳥居強右衛門
55	2, 29	猫の怪談
56	3. 7	キジもなかずばうたれまい
57*	3. 14	寺山の石餅
58	3. 28	千体骨の地蔵尊
59*	4. 4	空道さん
60*	4. 11	牛の瀧
61	4. 18	そばの茎は何故赤い
62	4. 25	櫻淵の龍宮様
63	5. 2	どろぼうてんぐ
64	5. 5	蛇と愛を誓った娘の話
65*	5. 16	吉川あれこれ
66	5. 23	吉祥山
67	5. 3	大松屋敷の白蛇
68	6. 6	こいこいという波の音
69	6. 13	川尻ばばあの古提灯
70	6. 2	桃酒、菖蒲酒、菊酒
71*	6. 27	カメ割れ
72	7. 4	お菊大明神
73	7. 11	くらがえ淵
74*	7. 18	亀淵の忠右衛門
75	7. 25	穴滝明神の大ケヤキ
76	8. 8	消えたコマ犬
77	8. 15	六部と四十雀
78*	8. 22	田峰城主とあゆ
79*	8. 29	せきのこまん（上）
80*	9. 5	せきのこまん（中）
81*	9. 15	せきのこまん（下の一）
82*	9. 19	せきのこまん（下の二）
83*	9. 26	お弓橋
84*	10. 3	弓の名人久右エ門
85*	10. 17	かめの話
86*	10. 24	お波さん
87*	10. 31	天邪鬼
88*	11. 14	難題嫁
89*	12. 5	けちんぼう
90	12. 19	古屋のもうろう

1961（昭和 36）年／ 94 欠番？

91	1. 1	牛おきにおきたり
92	1. 9	正月十四日に年をとる話
93	1. 23	お正月に餅をつかない村の話
95	1. 30	植物の話　二題
96	2. 6	植物の話　二題
97	2. 13	石巻山と石
98	2.27	地名の由来　鉄砲焼その他
99	3.13	六助
100	4.17	浄瑠璃姫

＊印は新聞の掲載回数に誤記あり